中島敦「山月記」の授業実践に向けて
―副素材による教材研究の試み―

橋　本　正　志

はじめに

2022（令和４）年度の学習指導要領の改訂によって、高等学校ではそれまで必修科目であった「国語総合」（４単位）が、新たに「現代の国語」（２単位）と「言語文化」（２単位）に改められた。また選択科目も、従前の「国語表現」（３単位）、「現代文Ａ」（２単位）、「現代文Ｂ」（４単位）、「古典Ａ」（２単位）、「古典Ｂ」（４単位）から「論理国語」（４単位）、「文学国語」（４単位）、「国語表現」（４単位）、「古典探究」（４単位）に再編された。これらの改訂による教育現場への影響や、変更そのものに対する是非[①]については小論では触れないが、これまでの高等学校での国語科教育のあり方に大きな変化がもたらされたことは確かであろう。

こうした学習指導要領の改訂を幾度も経る中で、中島敦（1909 ～ 1942）の「山月記」は多くの高等学校の教科書に採用され続けている。いわゆる「定番」教材として、根強い人気を保ってきたのはなぜなのだろうか。作品の主題については、鷺只雄氏が第一に「存在の不条理性」、第二に「芸術にとりつかれた人間の苦悩」、第三に「性格の問題」と整理し、まとめて「おのれの尊大な自我故に虎と化し、理不尽な生を生きねばならぬ男の悲劇を通して芸術に執する者の苦悩を描いたもの[②]」と解釈したように、まずは主人公・李徴が虎に変身した理由を語る際の「生きものの**さだめ**」（傍点原文。以下同じ）などの表現が、「（虎とは異なる）人間とは何か」をめぐって深く考えさせるものであることが最も大きな理由としてあろう。

また「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」といった一見矛盾する言葉の組み合わせにより表現される、李徴の複雑な内面の告白を主調とした展開が、他

者との関わりで「自分とは何か」について内省し、〈自我〉と向き合う機会の増える高校生にとって、身近で強い印象を残す内容であることも理由の一つであろう。さらに、中国唐代の伝奇物語「人虎伝[③]」を主な素材としている本作品の、漢文訓読体に由来する格調高くリズミカルな文体によって、東アジアの国際社会との文化的な繋がりを感じ取り、自らの言葉と伝統文化に対する理解を深める目的において、極めて相応しい教材として受けとめられてきたことも大きいと思われる。これらが400字詰め原稿用紙換算でおよそ15枚という、抄録にする必要のない程良い長さの文章に含まれていることも、教材として望ましい要件の一つであったと思われる。

こうして文字通り「国民教材[④]」の評価を揺るぎのないものにしてきた「山月記」だが、これまで素材との関係性に触れる場合は、主たる「人虎伝」との比較についての言及がほとんどであり、両者の相違から「山月記」のオリジナリティを抽出する方法を採ることが多かったのではないだろうか。その一方で「人虎伝」と同じ〈変身譚〉として影響関係が指摘されてきたＦ・カフカ（1883 ～ 1924）の「変身」や、Ｄ・ガーネット（1892 ～ 1981）の「狐になった奥様」などの他の外国文学の典拠との比較に基づく読みは少なく、中でも後述するＧ・Ｋ・チェスタトン（1874 ～ 1936）との関わりに言及したものはほとんどなかったように思う。

しかし、中島のチェスタトンに対する強い文学的関心に着目することは、教材研究はもとより、作品成立の経緯を見きわめる上でも、また虎としての李徴の〈語り〉に留意して授業をおこなう上でも、これまでにない新たな視点の発見や展開に結びついていく試みとなりうるのではないだろうか。

たとえば、「山月記」の特徴ある表現の一つである「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」に関していえば、従来は中島の独創とされてきたこの表現自体が、逆説や警句を用いた批評に定評のあったチェスタトンの表現を直接用いたものである可能性が高い。教材研究では、そうした作者中島の「山月記」執筆時のチェスタトンに対する関心の強さを重視し、また彼の執筆動機と文学表現の雕琢の過程といった「山月記」成立の背景を理解することで、実際の授業においても幅広い視野に立った発問が可能となってくるはずである。

生徒にとっても自らの読みを新たに作っていくきっかけが、これまで以上に生まれてくるのではないだろうか。作品「山月記」の豊かさはそのようにして十分に引き出され、教材としても一層の可能性が新たに発見できるものと考えている。

そこで本稿では、上の見通しに基づいて「山月記」とチェスタトンの著作の表現を比較しながら、チェスタトンとの関連で「山月記」の教材研究の可能性を探ってみることにしたい。小論中に示した表は、実際に将来国語科の教員を目指している別府大学の2023年度「国語科教育法Ⅰ」の受講生に資料の一つとして配布したものであり、それらを参考に今後どのような教材研究や授業実践が可能なのかを考える材料として活用してもらったものである。とりわけ高校の国語科教員を目指す受講生にとっては、授業実践の前提となる多様な「山月記」理解に繋がるとともに、将来の教室においては新たな「山月記」の読みを引き出す発問を考案する機会ともなり、ひいては生徒も本作品のもつ魅力をあらためて獲得できるのではなかろうか。

なお、言うまでもなく「山月記」の教材研究は、必ずしも上記の方法に限定されるものではないため、以下の内容は「山月記」の授業実践に向けてのアプローチの一つであることをお断りしておきたい。

1.「人虎伝」以外の典拠をめぐって

さて「山月記」の教材としての歴史に着目し、その教材の特質や授業の変遷などについて考察した佐野幹氏によれば、「山月記」（1951 ～ 2012年度使用教科書）の設問中に登場する本文の「指示箇所」（多数順）は、以下の部分が主であるという。

「欠けるところ」
「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」
「我々生き物のさだめ」
「飢え凍えようとする妻子」

「おれの中の人間の心がすっかり消えてしまえば」
「おれは詩によって〜伍することも潔しとしなかった」
「人間はだれでも猛獣使いであり」
「時に、残月、光冷やかに」
「ついに発狂した。」
「詩人になりそこなって虎になった哀れな男⑤」

たしかに、これらは「山月記」の授業でもよく発問される箇所であり、いずれも読解において重要なものばかりである。ほとんどが素材「人虎伝」との比較を通じて、作者中島の独創部分として考えられてきた一節であるが、私見によれば、これらの多くに「人虎伝」以外からの典拠が指摘できるように思う。

従来、主な素材として「人虎伝」が指導書などに紹介され、「山月記」と比較がなされた上で、その相違が「山月記」の独創性を証するものとして重視されてきた一方、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」をはじめとする「山月記」独自の表現と考えられてきた部分にも「人虎伝」以外の素材が指摘できることはあまり言及されてこなかったように思われる。「山月記」の成立過程に重きを置いて教材化を試みる場合はもとより、「人虎伝」との相違などから「山月記」のオリジナリティを浮かび上がらせる際は、これまで指摘されてきた箇所すべてが中島の独創ではないという新たな観点から検討が加えられてもよいのではないだろうか。

したがって、「山月記」を素材との比較において読む場合には、「人虎伝」に加えて他の外国文学からの影響にも注目し、とりわけチェスタトンの著作に関心が払われてよいと思われる。いま仮に〈主素材〉と〈副素材〉という語を用いれば、従来は〈主素材〉である「人虎伝」との相違から「山月記」の特質を見出してきたのに加えて、今後は〈副素材〉としてのチェスタトンの著作との比較もあわせておこなうことで、中島の「山月記」の本来の世界観が浮かび上がってくるのではないだろうか。

筆者は、これまでチェスタトンの著作から「山月記」の典拠と考えられる

ものを明らかにしてきた[6]。中島の自伝的小説「狼疾記」の一節には「チェスタアトンの楽天的エッセイ等」が「弱々しい声々で彼を説得しようとした」とあり、実際に「山月記」と同時期に書かれた他の中島作品にはチェスタトンの著作からの影響が数多く指摘できる。一例を挙げると、「狼疾記」には「人間の自由意志の働き得る範囲の狭さ（或ひは無さ）を思はない訳に行かない。俺達は、俺達の意志でない或る何か訳の分らぬもののために生れて来る。俺達は其の同じ不可知なもののために死んで行く」（『中島敦全集１』409頁）とあるなど、そこには「山月記」における虎としての李徴の「声」による認識「しかし、何故こんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きものの**さだめ**だ」という一節との関連が明らかに指摘できる（濱川勝彦氏の表現する「運命の呼ぶ声[7]」とも関係があろう）。

次に掲げる表は、中島が参看したと推定されるチェスタトンの著作と、実際に内容的に関連があると思われる部分を試みに対比したものである。本表は「山月記」との厳密な影響関係の指摘を目的としたものではないが、小論の趣旨に基づいて、今後「山月記」の学習指導案を作成する際の参考に供するために、筆者が担当する「国語科教育法Ｉ」の受講生に配布したものである（なお、中島が参照したと思われる原文は英文であるが、ここでの引用は一部にとどめて、多くは各訳書から引用させていただいた）。

【表】「山月記」の典拠一覧（ただし「人虎伝」を除く）

「山月記」本文	チェスタトンの著作
・既に虎となつてゐた。自分は初め眼を信じなかつた。〔中略〕全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだらう。**分らぬ**。全く何事も我々には**判らぬ**。	Ⓐ人間と動物が似ているというのは、ある意味ではぜんぜん陳腐な決まり文句だ。けれども、これほどの相似を示していながら、しかもこれほど気ちがいじみた相違を示すということ――これは実際容易ならざるショックであり、**謎**（the enigma）である。

◎理由も分らずに生きて行くのが、我々**生きものの**さだめだ。	Ⓐ人間は人間の子をはらみ、人間の子を生む。魚や、コウモリや、怪獣の子を生みはしない。しかしその理由は、生命も目的もない**動物界の宿命**（an animal fate）に支配されているからではないかもしれぬ。
・其の時、眼の前を一匹の兎が駈け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。	Ⓐ獅子は小羊の傍に身を横たえながら、しかもなお百獣の王としての獰猛さを失わずにいられるか――これが問題だ。
◎一体、獣でも人間でも、**もとは何か他のものだつた**んだらう。初めはそれを憶えてゐるが、次第に**忘れて了ひ**、初めから今の形のものだつたと思ひ込んでゐるのではないか？	Ⓐ自分が**本当は誰であり何者なのか**、われわれはみな**忘れ去って**いるのである。 Ⓐみんな自分が誰だか**忘れてしまって**いる。
・後（あと）で考へれば不思議だつたが、其の時、袁傖（えんさん）は、この**超自然の怪異**を、実に**素直に受容れて**、少しも**怪まうとしなかつた**。	Ⓒ**超自然的な物語り**（a preternatural story）を**信ずる**のがもつと自然でありますぢや、〔後略〕
・己の中の人間の心がすつかり消えて了へば、恐らく、その方が、己は**しあはせ**になれるだらう。	Ⓐ**幸福**は、われわれが何かをしないことにかかっている。 Ⓑスティーヴンソンは「人（マン）は**幸せ**になりうるか」という問いにたいする自分なりの答えをもっていた。その答えは――「なりうる。大人（マン）にならないうちは。」 Ⓑ人間は複雑さに走るが、単純さを切望している。
・しかし、この儘では、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）**欠ける**所があるのではないか、と。	Ⓐヒューマーの感覚とか、相手にたいするいたわりだとか、あるいは経験の無言の重みなどにわずらわされることがない。狂人は正気の人間の感情や愛憎を**失っている**から、それだけ論理的でありうるのである。 Ⓐ概して狂人は論理家であり、しかも優秀な理

	論家であることがきわめて多い。〔中略〕狂人はたった一つの観念のとりことなっている。その牢獄は清潔無比、理性によってあかあかと照明されてはいるけれども、それが牢獄であることには変わりがない。彼の意識は痛ましくも鋭敏にとぎすまされている。健康人の持つ躊躇も、健康人の持つ曖昧さも、彼にはまったく**欠けている**のだ。
◎我が**臆病な自尊心と、尊大な羞恥心**との所為である。	Ⓑ**「たじろぐ自尊心」とか「怖じけづいた尊大さ」とか**〔後略〕（‘flinching pride’ or ‘quailing arrogance’） Ⓑスティーヴンソンは圧縮することに情熱をもっていた。あれほど多くを生み出しながら、言葉少なな人間になりたいという奇妙な野望を抱いていた。言葉については結合してそれがまた圧縮でもあることをつねに求めていたように見える――組み合わされたとたん、自分がほんとうに伝えたかった第三の意味を新たに生み出してくれるようなふたつの単語を探し求めていたように見える。 Ⓐたとえば、謙虚という問題を考えてみるがよい。単なる高慢と、単なる慴伏（しょうふく）との平衡をどう取るか。 Ⓐある意味では、人間はかつてためしのないほど**誇りを高く持つべきだった**。だがまたある意味では、人間はかつてためしのないほど**身を低く持すべきだった**。 Ⓐかつて人びとは、**謙虚であるが故にこそ、人目を怖れず堂々と行進することができた**のだ。だが今日のわれわれは、**あまりに誇り**

	が高すぎて、**人目に立つことをむしろ恥とする**。
◎**人間は誰でも猛獣使であり**、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。	Ⓐ他の動物はすべて飼い馴らされている。ただ**人間だけはけっして飼い馴らされることはない**。
◎嗤(わら)つて呉れ。詩人に**成りそこなつて**虎になつた哀れな男を。	Ⓐ偉人に「**なりそこなった**」偉人は多いというのもよく言われたことだった。しかし私には、どんな人間も「生まれ**そこなった**」人間でありえたかもしれぬという事実のほうが、もっと手応えのある、もっと驚くべきことのように思えるのである。
◎飢ゑ凍えようとする妻子のことよりも、**己(おのれ)の乏しい詩業の方を気にかけてゐる様な男**だから、こんな獣に身を堕(おと)すのだ。 ・之は**夢に違ひない**と考へた。夢の中で、之は夢だぞと知つてゐるやうな夢を、自分はそれ迄に見たことがあつたから。どうしても**夢**でないと悟らねばならなかつた時、**自分は茫然とした**。さうして懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。	Ⓐ自己を信じている人間は成功するとおっしゃる例の出版屋にしても、〔中略〕新しい生命を創造するかわりに、**自分の個性を世間にひけらかすことばかり考えている小説家の先生がた**にしたところで、実はみな、この物凄い妄想に即(つ)かず離れずつきあっている連中ばかりなのである。だがやがて、人間を取り巻くこの温い世界が嘘のように闇に消え、友だちは亡霊のように薄れて行き、この世の土台が崩れ去る時が来るだろう。そして、何も信じず誰も信じぬこの男が、**自分自身の悪夢の中にたった一人で立ちつくす時が来る**だろう。その時、かの偉大なるエゴイズムの格言は、皮肉な復讐の意味をこめて彼の目の上に書き記されるにちがいない。
◎時に、**残月**、**光冷やかに**〔後略〕 ・既に白く**光**を失つた月を仰いで、二声三声咆哮したかと思ふと〔後略〕	Ⓐ**月光のごとく冷やかに**実体がない。**光は見えても熱がない**。それにまた、死の世界から反射されてくるかりそめの**光**にすぎぬ。〔中略〕月は完璧に理性的であるからだ。そし

	て月はいつも狂気の生みの親なのである。古来、狂気を、月の引き起こす病いと言いならわすのは、けだし古人の知恵の伝えるところと言うべきであろう。

【備考】順不同。◎は直接の関連が認められる一節。下線部は内容上の対応関係が指摘できると思われる部分（**太字**はとくに表現上も類似していると思われる箇所）。なお、丸付きアルファベットは、以下のチェスタトンの著作からの引用を示す（Ⓐ『正統とは何か⑧』、Ⓑ『ロバート・ルイス・スティーヴンソン⑨』、Ⓒ「金の十字架の呪ひ⑩」）。中島はこれらの原書を参照して「山月記」の執筆に活かしたと推定している。

以上のように「山月記」と〈副素材〉としてのチェスタトンの著作の内容を比べてみると、多くの共通点が見出せるのではないだろうか。実際に筆者が「国語科教育法Ⅰ」受講生（16名履修）を対象におこなったアンケート調査によれば、「「山月記」にはチェスタトン（の著作）の影響はあると思いますか」との質問①に対して、回答した13名全員が「ある」と思うと答えた。もちろん内容がよく似ている箇所もあれば、表現もほぼ同様の部分もあるが、これらの多くが「山月記」の世界を成立させる箇所とも重なっていることは注目すべきであろう。

また、「教材研究の段階では（「人虎伝」以外に）チェスタトンとの関わりを重視しますか」との質問②に対しては、「重視する」と答えた学生が11名、「関わりについては考える」「重視はしない（興味深いけれども偏ってしまうため）」と答えた学生が１名ずつであった。いずれも将来どのような「山月記」の授業をおこなうかを念頭に教材研究の意義を見出し、今後の教材研究においては、こうしたチェスタトンの著作などにも目を向けて「山月記」の成立過程を踏まえた検討を試み、今一度「山月記」を考察する機会を設けることを選択肢の一つとして受けとめた学生が多かったように思われる。

このように、今後はチェスタトンの著作との関わりから「山月記」との共通点や相違点に着目し、「人虎伝」と同様に言及することで、各素材との関連部分をあらためて捉え直す授業の実践も視野に入ってくるのではないだろ

うか。

次節では「山月記」と副素材との関係を踏まえながら、いま少し教材研究のあり方について検討していきたい。

２．副素材に基づく教材研究と教材化

前節においては、「国語科教育法Ⅰ」の受講者に副素材との比較一覧を配布し、中島が参看したと思われるチェスタトンの各書の一節との関連性を踏まえて「山月記」の教材研究をおこなうことを選択肢の一つとして提示した。繰り返しとなるが、「山月記」におけるチェスタトンの影響について質問した結果、多くの学生がチェスタトンの著作からの影響があると答え、また今後の教材研究では「山月記」の素材としてチェスタトンとの関わりを重視したいと考えていることがわかった。実際に、将来「山月記」の授業をおこなうにあたっては、作品の成立過程にも目配りすることで、発問の幅も広がっていくものと思われる。

では、多様な授業実践や教材化の方法があることを前提に、「山月記」にはどのように向き合っていけばよいのであろうか。小論で扱っている成立過程にはあえて触れずに、作品世界のみに向き合う立場もあるだろう。筆者の授業では、いかなるアプローチが適切かの議論までには踏み込めなかったが、新たな素材との関わりを重視した「山月記」の教材化の可能性を指摘し、受講生には将来「山月記」の授業を実践する際に、とくに教材研究においては幅広く見渡した上で、何を重視して教材化するのかを明確にして指導案を作成することの大切さを付言した。

ちなみに、「山月記」は元々それ一篇で独立した作品ではなく、〈古譚〉という総題からなる四篇（他に「文字禍」「狐憑」「木乃伊」）の中の一作品として執筆されたものである。〈古譚〉にはいずれも「狂」や「死」で結末を迎える人間の悲劇が描かれているが、これらは1936年頃からのチェスタトンの思想的な影響でもあると思われる。中島の国語教科書編纂者としてのパラオ赴任前の作品であり、とくに「山月記」には、帰国後に執筆した「幸福」

にも受け継がれていくテーマが含まれている。したがって、「山月記」と執筆時期が近い〈古譚〉の各篇に共通する影響も当然多くあると考えられる[11]。

とくに、広い視野に立った探究的な授業をおこなう場合においては、作者中島の当時の文学的関心も引き合いに出し、いわばチェスタトンの著作との関わりで読むことで新たな方面から「山月記」に光を当てることができるのではなかろうか。いわゆる「山月記」の〈語り〉に着目する読みや、「人虎伝」との比較に基づく読み以外にも、異なった視角から従来の読みを相対化し、あるいはそれらを複数組み合わせることで、さらに新たな解釈が生まれてくる可能性も十分にあると思われる。

これに関して、かつて筆者は唐の時代の「山月記」の舞台社会のありようを念頭に、李徴の官僚としての挫折と「詩人としての名」を死後百年に遺すことが叶わなかったこととの関係性について考察したことがある。李徴の告白をめぐっては、例えば蓼沼正美氏が「虎」になった根拠の信憑性や、正確な自己分析として語られていたかどうかを問い、新たに「自己劇化」する様や「人間の愚かしさ[12]」に焦点化して以降、「山月記」の読みの更新が次々となされてきた。こうした多くの研究者による「山月記」研究の蓄積に触発されながら、以下のような文章を書いたことがあり、長くなるが参考までに引用してみたい。

> 「山月記」は、虎に変身した李徴の告白を手がかりに読まれるのが一般的だったが、一つ発想を変えて、李徴が不満を募らせていった中国唐代の社会のあり方――李徴をそのような状況に追いやった同時代社会の構造がいかなる性質のものだったのかを生徒に提示してみると新たな〈読み〉が生まれるかもしれない。
>
> つまり、李徴の悲劇の背後には、同時代である唐代の社会形態が深く関与していると考えてみる。当時、漢詩の発表の場はほぼ政治を執り行う官僚が構成するサロンに限られていたことから、その中に身を置き名声を上げることが、もっとも「詩家としての名を死後百年に遺」す可能性を有していた。「格調高雅、意趣卓逸」で「作者の才の非凡を思わせる」

に十分、しかも詩への飽くなき執着さえある李徴であったが、詩文が深く政治と関わっていた社会においては、詩人の名への渇望のあまりの官職の辞職が、皮肉にもみずからの宿願を打ち砕くことになっていた矛盾に終始気がつくことはない。「山月記」には、時に社会と自己との距離感すら見失わせるほど、ものごとに執着してしまう人間の烈しい心のありさまが描かれていると読むこともできるのである。

このように、最近の研究動向をふまえて李徴の〈語り〉の問題に注目したり、あるいは唐代の社会のあり方を生徒に提示したりすることで、指導書とはまた違った〈読み〉が可能なのであり、漢文の教材との関連性も生まれてくるといえよう⑬。

今後「山月記」の教材研究においては、少なくとも主素材「人虎伝」と同様に、副素材としてのチェスタトンの著作からの影響や、唐代の中国社会のあり方についても触れ、教材研究の段階でさまざまな読みの可能性を検討しておくことが有効であろう。生徒が「山月記」の新たな解釈を作っていく機会を多く設ける上でも、とくにチェスタトンとの関わりに着目することは、向後の「山月記」の授業の前提として試みられてもよいのではないだろうか。

筆者の「国語科教育法Ⅰ」の受講生には、叙上の見通しや教材研究の意義も伝えた上で、Web上の学術系検索サイト（Google Scholar）や論文データベースサイト（J-STAGE、学術機関リポジトリデータベース、CiNii Researchなど）も活用して、関連文献を調査しながら教材研究に取り組むように助言するとともに、授業の中では実際の高等学校の授業における生徒役にもなってもらい、何よりも「山月記」そのものに親しんでもらうために、『文学界』掲載の初出本文を配布し、筆者の朗読や解説を聞く中で、発表時の雰囲気や独特の漢文訓読体によるリズム感を味わい、内容を把握する機会となるように心がけた。同時に、生徒（受講生）には興味をもった部分に線を引かせたり、また印を付けさせたりするなどの指示も出し、できるだけその都度考えたことを言語化させるなどした。これらの作業を経て、「山月記」を前段と後段に分け、それぞれの内容の違い（語られ方など）にも言及した。

さらに、実際の「山月記」授業において山場となる「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」――各々矛盾する表現の組み合わせから成る有名なキーワードについては、配布した表を参照してもらいながら中島の創作過程についても触れた。「‘ flinching pride ’ or ‘ quailing arrogance ’」（「「たじろぐ自尊心」とか「怖じけづいた尊大さ」とか」）をはじめチェスタトンの複数の原書に由来すると考えられる表現にも言及することで、今後発展的な授業をおこなう場合も想定し、中島が原書を参考に「羞恥心」をも新たに対に組み合わせた可能性や、その独創性の度合いを分析するなどして、従来とは違った「山月記」へのアプローチを提示するよう努めた。少なくとも「山月記」の教材研究においては、「人虎伝」にはない表現を一つひとつ再検討することで、中島が「人虎伝」以外の素材も参照し、翻案したものである可能性が明らかに指摘できるといった、その表現の典拠が特定できる場合には、授業の前提となる正確な「山月記」理解と教材研究のためにも、指導書などにはそうした内容が明記されてもよいのではないだろうか。

今後、教室ではどのような「山月記」との向き合い方が考えられるのか。先の漢文学習との関連性のみならず、他教科（たとえば英語科）との接点も新たに生まれてくると思われる。まずは教材研究を通じて、とりわけ「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」などの有名な表現に新たな光を当てることで、これまで以上に生徒が虎としての李徴の「胸を灼く悲しみ」といった内面の表現に向き合い、自他との関わりにおいて考え深めるきっかけとなることを期待したい。

３．新たな教材観と授業実践へ向けて

「山月記」の教材研究においては、他にも李徴が虎に変身した（と考える）理由はもちろん、旧友の袁傪による（李徴の旧詩に）「欠ける所」の指摘についての解釈も重要である。「第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか」との一節については、先の拙論からの引用とも関連するが、詩文が政治と深く関わっていた唐の社会で

の成功者たる袁傪と、その社会からの脱落者である李徴の立場に由来するものと解釈し、いわば官僚と非官僚との「詩観の違い」からもたらされた批評であると考えることまでは可能であろう[14]。こうした点からも漢文教材との関連が生まれてくると思われる。

また「月（の光）」の表現に関しても、虎に姿を変えた李徴に残る〈人間の心〉の隠喩としてはもとより、中島の執筆時の関心に即して考えるならば、チェスタトン風の〈狂気としての理性〉を象徴しているとも解釈できる[15]。「人虎伝」には〈人間の心〉を暗喩する「月（の光）」の表現はないため、〈時間の経過〉などの作中における意義も指摘されてきた。しかし、チェスタトンの副素材をもとに解釈すれば、「月（の光）」は単なる〈人間の心〉の象徴のみならず、「狂気」を含めた人間の理性の象徴として描かれている可能性もあり、むしろ中島のチェスタトン受容に関わる重要な姿勢が垣間見られる部分であることだけは指摘しておきたい。

このように、執筆に際して大きな影響を受けていたチェスタトンの原書の内容を参照してみると、「欠ける所」の内容を単に臆測で〈人間性の欠如〉と結びつけたり、逆にそれを一概に否定し去ったりすることは適切ではないように思われる。中島の執筆時の文学的関心を切り離した解釈をするのならばともかく、単に「作品に書いてないのだから、わからない[16]」などと一蹴するには惜しい、さらなる検討の余地と可能性が見出せる部分である。授業で取り上げる場合は、作品読解にはさまざまなアプローチの仕方があり、その立場や視点によって多様な読み方が存在することを生徒に気付かせるためにも、むしろ欠かせない問いになってくるのではないだろうか。

かつて増淵恒吉氏は、「欠ける所」について「明確な解答は期待しない方がよいが、一応は考えさせておいてよい」とした上で、「深い精神の持ち方」「人間性」「現実の生活と深いかかわりあいを持って、人生を生き抜く誠実さ」を解釈例に挙げた[17]。たしかに「叢」の中から〈狂気〉の象徴たる「月（の光）」に照らされながら、淀みなく語る自己告白と、その冴え冴えとした理性のありようは、直後の袁傪の「旧詩」への率直な評価（「欠ける所」の指摘）を引き出したが、そうした流れにおいて、そこに「人間性」が欠けていたとす

る解釈は、チェスタトンとの関わりを重視する読解においては、可能性としてはあり得る一つの解釈ではあったであろう。

もちろん、「系統主義や能力主義の時代に必要とされた[18]」社会的要請の中で、増淵氏の例解が現場で引き継がれていった側面も大きいと考えられるが、「山月記」の成立過程をあらためて子細に検討した上でこの物語を読み解くならば、増淵氏の「人間性」にまつわる解釈は、きわめて偶然ではあるが、今なお全くの臆見として斥けることはできないようにも思われる。

以上は、筆者が「山月記」を作者中島の「自己批評[19]」の物語として捉える論考も参照しながら、「山月記」の創作資料との関連で教材研究をおこなう立場から試みに呈したものである。「学習者の多様な解釈を認める方向を示すようになったことは、評価すべき変化だろう[20]」との指摘とあわせて、新たな資料に基づく教材研究がなされることは、教室における教材としての魅力を引き出し、授業実践のさらなる可能性を拓いていく上でも有意義であると思われる。ある意味では、これまで「山月記」の有する可能性の全貌に触れぬまま、教室空間に「山月記」を流通させてきたのかもしれない。学習指導要領が新たに改訂された昨今においても、引き続き高等学校の定番教材として「山月記」のもつ豊かさが見出されていくことを期待するものである。

おわりに

以上のように、「山月記」の教材研究においてはイギリスの作家・批評家チェスタトンの著作の影響を踏まえることで、新たな「山月記」解釈に繋がる可能性が生まれ、教室での読みも一層豊かになっていくのではないだろうか。「山月記」の教材研究は、主素材「人虎伝」との比較や〈語り〉の問題のみならず、作者中島の執筆時のチェスタトンに対する関心にも目が向けられてもよいと思われる。近年、他教科とも関わらせた言語活動の実践が求められる国語教育の場においては、英語教育との接点も見出すことが可能であり、「総合的な探究の時間」の取り組みにも発展していく可能性もあろう。

なお個人的に危惧していることは、今回の学習指導要領の改訂によって、

「定番」であった「山月記」に触れる機会のないまま高等学校を卒業する生徒も多く出てくることである。一方で、中島敦を主人公とするマンガ「文豪ストレイドッグス」（朝霧カフカ原作、春河35漫画）が近年大きなブームを呼んでいる。こうした時代だからこそ、副素材との関わりからあらためて「山月記」を読み直すことで、中島がいかに「人虎伝」の他にもチェスタトンの著作の表現を取り入れながら「山月記」を成立させていったのか、教材研究の段階で把握しておくことは、将来教職に就くことを希望している学生にとって、メディアも含めた幅広い視野に立ち、確かな知見に基づいた授業をおこなう上でも欠かせない取り組みであると思われる。

「山月記」の授業は、単に「人虎伝」との関わりや指導書の内容のみに終始することなく、確たる教材研究を前提として多様な観点から実践されることが望ましいのではないだろうか。虎に変身した李徴の強い後悔のありようを受け止める袁傪の立場や、彼らが生きた唐代社会の成り立ちにも注目し、また作品の書き手・中島の執筆時の文学的関心や、複数ある素材との関連性、作品が発表された時代性、今後の展望なども視野に入れながら、まずは十分な教材研究をおこなうことが求められよう。その上で、教室での授業を通じて生徒に何を考えさせるのかについて明確にしていくことがあらためて重要なのではないだろうか。

以上、多くの蓄積を有する「山月記」研究（史）に十分触れ得なかった憾みがあるが、主に「人虎伝」以外の典拠との関わりから述べてきた。今後は実際の授業実践においてどのような指導案や展開が創案できるか、引き続き国語科教員を志望する受講生とともに考えていきたいと思う。

付記

別府大学の2023年度「国語科教育法Ⅰ」受講生には、拙論中に触れたアンケートへの回答をはじめ多くの協力があった。記して感謝の意を表します。

なお、中島敦の文章の底本は『中島敦全集』全3巻（筑摩書房、2001年10月、2001年12月、2002年2月）とし、引用は全てこれに拠った。引用の際は、原

則としてルビ・傍点・旧仮名遣いはそのままとし、旧漢字は新漢字へ改めた。

---

① 紅野謙介著『国語教育の危機―大学入学共通テストと新学習指導要領』〈ちくま新書1354〉（筑摩書房、2018年9月）などに詳しく論じられている。

② 鷺只雄氏「古譚」―物語の饗宴」（『中島敦論―「狼疾」の方法』〈Litera Works 2〉所収、有精堂出版、1990年5月）261 ～ 262頁。

③ 国民文庫刊行会編『国訳漢文大成』〈文学部第12巻晋唐小説〉所収、国民文庫刊行会、1920年12月。

④ 佐野幹著『「山月記」はなぜ国民教材となったのか』（大修館書店、2013年8月）11頁。

⑤ 前註に同じ。268頁。

⑥ 拙稿「中島敦のG・K・チェスタトン受容―「山月記」「幸福」と『Orthodoxy』との比較から」（『別府大学紀要』第63号、2022年2月）、同「中島敦「光と風と夢」論―G・K・チェスタトン『Robert Louis Stevenson』との比較から」（『別府大学紀要』第64号、2023年2月）、同「中島敦「山月記」「木乃伊」ほか典拠考―G・K・チェスタトンの影響をめぐって」（『別府大学国語国文学』第64号、2023年3月）、同「中島敦「山月記」から「幸福」への展開―パラオの伝説とチェスタトン『Orthodoxy』を手がかりに」（『立命館文学』〈瀧本和成教授退職記念論集〉第685号、2023年8月）を参照されたい。

⑦ 濱川勝彦編『梶井基次郎・中島敦』〈鑑賞日本現代文学〉第17巻（角川書店、1987年8月、再版）322頁。

⑧ G. K. Chesterton, *Orthodoxy* (New York: Dodd, Mead & Company, 1908). 引用は1924年の版に拠った。なお、本書の訳文には安西徹雄氏の訳を引用し、参照させていただいた（G.K.チェスタトン著／安西徹雄訳『正統とは何か』〈新版〉春秋社、2019年4月）。

⑨ G. K. Chesterton, *Robert Louis Stevenson* (London: Hodder and Stoughton, n.d.). 引用は1927年刊の初版に拠った。なお、本書の訳文には

別宮貞徳･柴田裕之両氏の訳を引用し、参照させていただいた（ロバート･ルイス・スティーヴンソン／別宮貞徳・柴田裕之訳『G・K・チェスタトン著作集〈評伝篇〉5　ロバート・ルイス・スティーヴンソン』春秋社、1991年11月）。

⑩ G. K. Chesterton, The Curse of the Golden Cross (From *The Incredulity of Father Brown*), *Stories, Essays, & Poems*. Everyman's Library, No.913 (London: J. M. Dent & Sons, 1935). 引用は初版に拠った。なお、本作品の訳文は「金の十字架の呪ひ」（チエスタートン作／直木三十五訳『ブラウン奇譚』〈世界探偵小説全集〉第9巻所収、平凡社、1930年3月）から引用した（総ルビは省いた）。

⑪ 拙稿「中島敦「山月記」「木乃伊」ほか典拠考―G・K・チェスタトンの影響をめぐって」（前出）参照。

⑫ 蓼沼正美氏「『山月記』論―自己劇化としての語り」（『国語国文研究』第87号、1990年12月）56頁。

⑬ 拙稿「国語教育と近代文学研究」（立命館大学日本文学会ハンドブック編集委員会編『ハンドブック　日本文学研究学域』所収、立命館大学日本文学会、2009年4月。引用は3版第2刷、2017年4月発行に拠った）299～300頁。

⑭ 拙著『中島敦の〈南洋行〉に関する研究』（おうふう、2016年9月）参照。

⑮ 拙稿「中島敦「山月記」から「幸福」への展開―パラオの伝説とチェスタトン『Orthodoxy』を手がかりに」（前出）参照。

⑯ 関良一氏「「ギリシャ的叙情詩」と「山月記」について」（『国文学 言語と文芸』42、第7巻第5号、1965年9月）65頁。

⑰ 増淵恒吉氏「文学作品における形象の問題―「山月記」の取扱い方について」（『日本文学』第5巻第11号、1956年11月）22頁。

⑱ 佐野氏の前掲書。132頁。

⑲ 木村一信氏「『山月記』再説―自己批判・自己否定を試みる物語」（『中島敦論』所収、双文社出版、1986年2月）193頁。

⑳ 佐野氏の前掲書。272頁。